

題目 ゴシップを聞いた第三者がゴシップをする人に対して抱く印象に関する検討

氏名 杉山めい菜

指導教員 高橋伸幸

人間は他者と協力することで社会を形成している。協力行動とは自分でコストを負って相手に利益を与えることである。わざわざコストを負ってまで人はなぜ協力するのだろうか。それを説明する考え方の一つに直接互惠性 (Trivers, 1971) がある。直接互惠性とは、人に協力することで協力した人から直接見返りが得られるから、協力をするという考え方である。では、二度と会わない人にも協力するのはなぜだろうか。これは間接互惠性で説明できる。間接互惠性 (Nowak & Sigmund, 1998) とは、直接の見返りが得られない状況でも、他の人からの協力が得られることで間接的に見返りを得られるという考え方である。この間接互惠性では評判が重要になる。その評判情報を手に入れる方法としてゴシップが考えられる。つまり、ゴシップをする人は評判情報という有益な情報をもたらす存在といえる。それにも関わらず、ゴシップをする人は往々にして非難されがちである。では、どのような場面でゴシップをする人は悪く思われるのだろうか。これを調べるために、ゴシッパーがターゲットの悪い情報を言ったときオーディエンスはゴシッパーのことをどう思うのかということ共変モデル (Kelley, 1973) を用いて検討した。共変モデルとは人の行動の原因を合意性、弁別性、一貫性という3つの情報に基づいて推論する考え方のことである。弁別性とは、特定の状況に対して他と行動が区別されている程度を表す。合意性とは、他の人と行動が一致している程度を表す。本研究では、ゴシッパーがターゲットの悪い情報を言ったときゴシップの原因がゴシッパーに帰属されるのかを検討するため、シナリオの弁別性と合意性の高低とゴシップの内容が道徳か能力かを操作した。質問紙の回答者は、シナリオを読み、その後登場人物に対する印象や、登場人物の行動の動機、登場人物に対してどのような行動をとるかについて回答した。その結果、大半の因子と項目で道徳・能力、弁別性、合意性に差が出なかった。本研究では仮説は支持されなかったことから、回答者は仮説とは違う方向で評判を形成していたことが考えられる。共変モデルが機能するためには、弁別性、合意性、一貫性の情報が必要だが、これらすべての情報を入手できなかった場合、不十分な情報でも原因を帰属させることができる。この曖昧な情報や不十分な情報でも原因を推論することが可能であるという考え方を因果スキーマ (Kelley, 1973) という。本研究でシナリオから弁別性、合意性、一貫性を読み取ることができなかった場合にこの因果スキーマが働いていたと考えられる。想定していない別の要因が影響する可能性を考え、必要最低限の情報のみをシナリオに入れたが、回答者が具体的な場面を想定しにくく情報が不十分だった可能性がある。想定していない別の要因が出ない程度に、詳細な場面をシナリオで表現する必要がある。